

私のかけ湯作法

二川原良三

いささか尾籠で卑猥な品の落ちる話である。が、ちよつと気になることもある。テレビのバラエティ番組出演者か、街頭インタビュアーであったか、

「ダンナのウンコのついたパンツと一緒に洗うのはゴメンだ」との発言があった。

私は笑ってしまった。それにダンナのお尻の方も、どうなっているのだろうか。独り者の私には、別にウンがついても洗濯の問題はない。

別の番組で、温水洗浄便座の正しい使い方という話があった。まず尻に温水を流してから紙で拭くのが正解だという。紙を先にすると、肛門の皺の間に便をなすり付けてしまい温水シャワーでは取りにくい状態になる、云々と。出演医師の解説であった。

私の家にウォシュレットがないから、ウン付きパンツになりかねない。

観光地の温泉や近郊の温泉でも、入浴の時に、ただ単にへかけ湯をしてからお入りください」としか表示されていない。

その温泉に関して、私が二十五年前、自費出版した本がある。『私家版温泉案内・関西西宮発 極近日帰り温泉紀行』というものである。関西の温泉、五十七箇所を入浴し、巡った紀行文である。その時の各温泉の印象を五段階に分け評価をしている。その中にちよつと面白い温泉があった。拙著の一部を引用してみる。

「二階の部分に浴槽が二つ。白湯と茶褐色の湯がある。茶褐色の浴槽へは壁が仕切られていて、床には湯が張ってありコの字型になったスロープを降りて行くようになっていて。膝下から、太ももあたりへと次第に深くなって行く。湯のみちの行き着いた先は広がって、先端部で壁が途切れ湯船が一つになっているのであった。

その時、ひとりの女性がいて、「あらっ」と声を出して岩陰にすつと消えたのであった。粋な造り?と感心したものだ。阪神淡路大震災後に行った時には、上の方は空いていたが、先端部の浴槽が太い竹が横並びに重ねられ塞がれていた。震災時に、温泉を無料開放した時、悪さをする輩がいて先端部を仕切ることになったと聞いている。

もうひとつ、

「……露天風呂の真ん中に仕切りがあって、角材を中に二本渡し、十センチほどの幅板を、向こう側、こちら側と交互に釘で打ち付けられている。つまり、簀子状に造られた仕切り扉で、斜め方向から見ると、向こう側の女湯が垣間見えるという趣向。大らかである。

それに、である！ 何気なく触れた幅板がコトンとずれたのだった。その一枚だけが釘

が抜けて、ただ立てかけてある。修理する積りがあるのか、ないのか。酔客の悪戯か。ひとりでニヤリ……」

と記している。話を戻して、テレビの温泉番組は、必ず見ることにし録画をしている。バスタオルを巻いて入る場面、テレビだから当然のことだ。しかしそれで果たして、と思うことがある。

ある温泉番組で、自宅の庭に露天岩風呂を造った人が紹介されていた。その人曰く、「よくかけ湯と言いますがそれは間違い。まず下半身をしっかりと洗うことが正解です」と。同感。大正解だ。テレビのバスタオル組が気になったのはそのことである。拙著で巡った温泉地の全てでも、その作法を実行している。

そこで私の温泉宿ご主人への提言。

湯船に入る前に、単にかけ湯としないで、例えば

〃金次郎様、黄門様を清めてからお入りください〃と表示すべき、と。女性風呂なら〃黄門様、お千の方をお清めしてからお入りください〃と。(作者注・単位を変えず千と表記)。

或いは、〃おん前とお後ろ正すよき湯かな〃でもいい。それ等の文言を表示して欲しい。無機質なアクリル板ではなく、古木等を加工、工夫した表示板に、である。温泉マークに加え、お尻マークを作成してもいい。いいアイデアだ。

そうした遊び心があれば、センスもあると言えよう。粋な宿主である。浴をいえば、否、欲をいえば、次のような方法はどうだろう。それは吉幾三の曲『雪国』の替え歌を流すのである。

〃好きよ お風呂 今でも 今も

お湯はいつでも 湧いてきます

入りたくて 入りたくて 待ちきれず

何もせず 洗わずに 入るのはダメ

前、後ろ お湯かけて

お湯かけて、湯の〃国〃

と。歌は湯字工事をお願いして、施設内に流してはどうか。拙文を読まれる方はこの曲を思い浮かべ、同じ調子で歌うと興趣が増し仮想入浴気分になれるのでは、と。温泉だから流すのは、湯だけでなく曲も、である。

私の提案などお構いなしに、先にあげたウン・パン者等は、そのままザブン！ その湯を顔にも掛けて……、

「ああ、いい湯だ。生き返る」と。

その入浴法で、病原菌に感染したという話は聞かない。私は温泉ソムリエではないが、温泉に殺菌効果があることは知っている。温泉施設側で、殺菌対策もしているのであれば下半身無視でも医学的に問題はないということになる。

同じ温泉なら、殺菌処置をした循環、濾過型温泉よりも、源泉かけ流し型の方がいい。それも、一度に大勢の人が入らない貸切り露天風呂がいい。野趣あふれる野天風呂なら言うこと無しである。

ついでながら、貸し切り風呂等は、体に手術跡がある人や、特殊芸術描画のある人も資するよう設けてあるものと私は思っている。

手術跡といえ、寅さんこと渥美清は若い頃結核で右肺を切除している。そのこともあってか寅さん自身の入浴場面はなかったように思う。それに片肺で激しいアクションもできなかつたという。

温泉の細菌など関係なく、温泉の治療効果を期待して長逗留する湯治場もある。神経質になるのはおかしいということになる。私の尻にこびりついた柔な菌など、温泉に入っでしまえば、たちどころに菌は死滅するだろう。

私は言う程に神経過敏症ではない。その神経質つながりでいえば、私が二十代の頃に読んだ岩波新書の『インドで暮らす』を思い出す。

インドのガンジス川はヒンドゥー教徒にとつて聖なる川である。沐浴が行われ、死後この川に焼葬された人間の灰を流すと極楽往生すると信じられている、と。沐浴している近くには動物の死骸も流れているという。

日本の四万十川や仁淀川のような清流ではない、濁った流れである。神経質など、とうに超越した日本人とは違う価値観に驚かされたのであった。一種の感動さえ覚えたのである。

そのことを考えれば、たとえ温泉に多少のウンが溶け込んでいようがお構いなしということになる（のだろう）。

それに寅さんも言うに違いない。

「不潔……？　じゃあ何か、この俺がこの温泉に入つて菌に感染して、虎ふぐのように膨れパーンと音を立てて破裂でもするか？　虎ふぐの破裂、寅と虎ふぐで一蓮托生だ。結構じゃないか。結構毛だらけ猫灰だらけ、お尻の周りはクソだらけ。ドボンと飛び込んだじゃえ。あついけねえ、漏らしそう……ウンチ」と。

不潔、清潔の結論は、一時はやった、「ソナナノカンケイネー、ソナナノカンケイネー」ということになる。

昔、田山花袋の『温泉めぐり』を読んだことがあったが、前と尻のことは書いていない（はずだ）。また高浜虚子の句、〃からからと初湯の桶をならしつゝ〃がある。虚子も花袋と同様、何もせずに？ 昔も今も変わらないか……。

それでも先に記したが、私はまず下半身を先にして洗い流す。私自身のマナーとしている。運は流し逃してはいけませんが、もうひとつのウンは流して……と。

私の蘊蓄、こだわり温泉作法、温泉物語。やはり品格を欠き、随想とも違う情緒に乏しい茶化した文章である。

しっかりとした正しいかけ湯作法に合わせ、しっかりとした『かけ文』をもせねば……、と。